

ウィニフレッド・ワトソン作  
最所篤子訳

## ミス・ペティグールの素敵な一日

Miss Pettigrew Lives for a Day, by Winifred Watson, Translated by Atsuko Saisho

第二章 午前一一時一分 午前一一時三五分

フィルがボタンとドアを閉めて出て行くと、ミス・ペティグールのうきうきした心のドアもボタンと閉じてしまいました。さっきまで冒険とロマンスと喜びに浮かれていたというのに、急にまた、ぐったりと疲労を感じ、役立たずでおどした自分が戻ってきました。一瞬だけロマンスを垣間見る幸運に恵まれたけれど、それはミス・ペティグールの人生には縁のないものなのです。またしても現実が、日々の恐ろしい心配事が胸の中でふくれあがってきました。そうです、ミス・ペティグールは仕事に応募してきた身の上で、ミス・ラフォースは雇い主なのです。フィルが何者なのか、彼の苗字が何なのか、フィルにキスされてあんなにうっとりとしていたくせにミス・ラフォースが彼をとっとと追っ払いたがったのはなぜなのか、そんなことはミス・ペティグールの知ったことじゃありません。

震える指でほつれた髪の毛を後ろに押しやると、お決まりのつらい試練に備えました。取り立てて見るところもない資格を申し述べなくてはいけません。

「あたくし……」とミス・ペティグールは声を励ましました。

と、ミス・ラフォースがさっとミス・ペティグールの前にひざまずくと、彼女の両手をとりました。

「あなたは命の恩人よ。なんて感謝していいか！ 命どころじゃないわ。あたしの顔を救ってくださったの。あなたがいてくださらなかつたら、どうしていいかわからなかつたわ。あの人を自分で追っ払うなんて絶対にできなかつたもの。本当にどうお礼をすればいいのかしら」

「成功したくば、好機を逸すべからず」といういかめしい金言がミス・ペティグールの心に浮かびました。残った勇気をかきあつめ、ミス・ペティグールはおずおずと言い始めました。

「それでしたら……」



島田圭子画

でもミス・ラフォースは聞いてはいませんでした。早口で身振り手振りを交えてペチャクチャしゃべっています。しかし、その目が笑いを含んで輝いていても、ミス・ペティグルーにはミス・ラフォースが困り果てていて、自分に助けを求めているのが感じられます。

「あなた、胸がどきどきしてる？」とミス・ラフォースが聞きました。「あなた、目はいい？」

ミス・ペティグルーの胸はもちろんどきどきしていましたが、心の中でこう言いました。「もう嘘をついちゃったんだもの、もう一回ついたって同じだわ」

「あたくしの胸はどきどきしておりません」とミス・ペティグルーは言いました。「それから、あたくしの視力はたいへんよろしいです」

「よかった！」とミス・ラフォースは胸をなでおろしました。「きつと冷静なタイプだつてにらんだのよ。あたしはもうどきどき。だからね、自分ではちゃんと見られないって思ってたの。ね、探偵小説にあるでしょ。ぜんぶきれいに片付けて、うっん、片付けたつもりになってるんだけど、最後に探偵がうるうる突っついて歩いて、パイプを見つめるか、灰を調べて、それが葉巻の灰だっていうことに気づいちゃうかするじゃない。『ほう！ それじゃお嬢さん、あなたは葉巻をお吸いなんですな？』で、もう逃げ道はないってわけ」

「なるほど」とミス・ペティグルーは言ったものの、さっぱりわけが分からず、ミス・ラフォースのフリットに警察官たちや警部たちや探偵たちの幻を思い浮かべて目を白

黒させました。

「いいえ、わかってないわ。ちゃんと説明しなくっちゃ。今朝、ニックが来ることになつてるの。とにかく来るはずよ。あたしの尻尾をつかまえようとしているんですもの。あの人、悪魔みたいに嫉妬深いの」

ミス・ラフォースの調子ときたら「さあ、これで全部、白状したわ。あとはあなたの情けにすぎるしかないの。でもきつと助けてくださるわね」といわんばかりです。

ミス・ペティグールは未知の大海にざぶんと飲み込まれ、なんとか波間に浮かび上がろうと必死になりました。

「それじゃ、もう一人、若い男の方がこれから来るっておっしゃるのですか？」と彼女は震える声で聞きました。

「そうなの」とミス・ラフォースはほっとして言いました。「あなたなら分かってくさるでしょ。ね、全部きれいに片付けていただけない？ 髪の毛一本残さず、別の男性がいたなんて、思いもよらないように」

今やミス・ペティグールは頭のでっぺんまで大波に飲み込まれていましたが、なんとか弱々しい声を振り絞りました。

「一番安全なのは、その方を入れないことですわ」

「そうね。でもだめなのよ」

「なぜですか？」とミス・ペティグールは驚いて聞きました。

「あの人、怖いんですもの」とミス・ラフォースは簡単に言いました。

「もし」とミス・ペティグールは驚くべき勇気を出して言いました。「もし、その若い方が怖いとおっしゃるなら、あたくし……あたくしが代わりにドアのところで『お嬢様はおられません』ってきっぱりと言ってさしあげますわ」

「だめなの！」とミス・ラフォースは両手をもみ絞ります。「彼、ノックなんてしないわ。だって鍵を持っているんですもの。入ってくるだけよ。それにどうしたって無理なの。彼が家賃を払ってるんだから、ね、分かるでしょ」

「なるほど」とミス・ペティグールの声は消え入りそうになりました。なるほど。こんな、とてもついていけません。帽子とコートを持って、鼻をつんと上にあげて、ぶんぶん腹を立てながら出て行くべきでしょう。でも、できませんでした。自分のか細い声が言っているのが聞こえました。

「それじゃ……それじゃ、昨晚、もう一人の若い方をお断りするわけにはいかなかったんですの？」

「しかたなかったの」とミス・ラフォースは絶望的に言いました。「とってもややこしいんですもの。まず、ニックが来るって知らなかったの。昨日の夜遅く、ほんの偶然に知ったのよ。ほんとは明日、帰ってくるって言ったのよ。彼、旅行に出たの。たぶん……あの人、あたしをちよつと疑ってるんだと思うわ。とにかく、フィルがうちに来ていいかって言ってきたとき、いいわよって言っちゃったの。でもその後でニックが帰

つてくるって聞いて、フィルを断るわけにいかなくなつて。ぜったいぼろがでない言い訳を考え出すなんて、あたし得意じゃないのよ。それにフィルに疑われるのも困るし。あの人、ニツクのこと知らないの。次のショウウのスポンサーだし。ね、分かるでしょ」「なるほど」とミス・ペティグルーは言いました。度肝を抜かれましたが、わくわく、いえぞくぞくしてきました。骨の髄までぞくぞくします。だってそうじゃありませんか。これが人生というものなんです。これこそドラマ、これこそ事件。ミス・ペティグルーの知らない世の中の人々の半分はこんな人生を送っているのです。

「じゃ、あなたにやっていただきたいこと、お分りかしら?」「ミス・ラフォースは懇願しました。「とっても大事なことなの。やっていただけける?」

ミス・ペティグルーはじつとしたまま、心の中で自分と戦っていました。

「貞節を守りなさい」というのが父の教えでした。「罪びとを追い、彼を拒みなさい」。両親の厳しいしつけや、貞節きわまりない独り身の生活、これまで信じてきた道徳観がもろ手をあげて断固抗議しています。それから、ミス・ペティグルーはテーブルにしっかりとえられた自分の席、コーヒーマグの杯、お皿につみ重ねられたバターをたっぷり塗ったトーストのことを思いました。ミス・ラフォースは知る由もありませんでしたが、これがミス・ペティグルーにとって今日はじめて口にした食べものと飲みものだったのです。

「申し上げたとおり」とミス・ペティグルーは言いました。「あたくしの視力はたいへん優れております」

そう言うと、彼女は寝室に入っていました。手早く寝室と隣の浴室から男性がいた痕跡を、爪の切りくずに至るまで消し去ると、居間に戻ってきました。ミス・ラフォースは電気式の暖炉の前のソファに座ってくつろいでいました。彼女は彼女で、朝食のお皿をぜんぶ片付けて証拠隠滅に忙しかつたのですが、まだ例の美しいネグリジェを着たままです。それを着ていると、男を惑わす妖精キルケを無邪気にしたように見えました。「さて」とミス・ペティグルーはみじめな気分でした。「こんどこそ、仕事の話だわ。もう後回しにしようがないもの」突然、目の奥に慣れないじんとする痛みを感じました。ミス・ペティグルーは涙がなんの役にも立たないことをもうずっと前に学んでいたのです。(ああ、もういや)とミス・ペティグルーは急に思いました。(あたくし疲れたわ。仕事やら他人の家で暮らすことやら、他人の気持ちをうかがってばかりいることにつくづくくたびれてしまったわ)

ミス・ペティグルーは、願いが聞き届けられることをあきらめたように、悲壮な威厳を保ってゆつくりと部屋を横切り、ミス・ラフォースの向かいの楽な椅子に腰掛けました。両手を膝の上で組み、しっかりと握り合わせました。ミス・ラフォースはみなしごとを二、三人どこかにしまいこんでいるかもしれませぬ。けれど、こうして人をだますことにせつせと手を貸してしまつた以上、自分が家庭教師にふさわしいと思つてくれるかどうか、怪しいところです。母親というものは、自分の子供のこととなるとどう反応す

るか見当もつきません。ガチヨウにあうソースがガンにもあうとは限らないのです。

「それでは……」とミス・ペティグルーはやけっぱちになって言いました。

ミス・ラフォースは熱心に身を乗り出しました。

「うまく片付いた？」

「もちろんです」とミス・ペティグルー。「ご安心なさってくださいまし」

「ああ、ありがとっ！」ミス・ラフォースは感激して身をさらに乗り出すと、またミス・ペティグルーにキスしました。と、そのときです。ミス・ペティグルーのしつかりと握り締めた両手の上に、水滴がぼたぼたと落ちました。そしてもう二粒が頬を転がり落ちていきます。ミス・ペティグルーの顔がほんのり桜色に染まりました。

「あたくし」控えめにミス・ペティグルーは言い訳しました。「あたくし、あまり人に優しくしていただいたことがなくって」

「まあ、かわいそうに」とミス・ラフォースは優しく言いました。「あたしはいつも優しくされっぱなし」

「それはようございました」とだけミス・ペティグルーは言いました。

これで二人はすっかり打ち解け、ミス・ラフォースは気をきかせて涙のことを何も言いませんでした。

「それで……」とまたミス・ペティグルーは言いはじめました。

「あなたがほんと話の分かる方だからよ」とミス・ラフォースがさえぎります。「すぐにぴんときたの。あたし、第一印象がよくあたるのよ。この人は、って思ったの。絶対、同じ女性を裏切らないって」

「もちろんですわ。そんなこといたしません」

「でしょ。ね、もつずいぶん親切に甘えてしまったけれど、もうちょっとだけいてくださらない？ ほら、ニックがいつ来るかしれないでしょ。いてくださったらありがたいわ」

「ここに」とミス・ペティグルー。

「そうよ」とミス・ラフォースはすがりつくように答えます。

「もし……もしあたくしでお役に立てますなら」とミス・ペティグルーは言いました。「ね、ニックってとっても危険なの。だからフィルのことを気づかれちゃまずいのよ。ニックのほつがフィルよりお金もあるし、実力者なの。だからフィルに何かひどいことをするなんて簡単なのよ。そんなの困るわ。間違ってるもの。だって、あたしがフィルを誘ったのよ。フィルはね、シヨウのスポンサーになってくれるって言うの。でもニックは違うのよ。やきもちやきだから。あたしのキャリアをこれっぽっちも助けてくれないの。でもね、どんなに好きな人がいたって、自分の仕事はほしいものじゃない。だからね、ニックがフィルを痛めつけるのは困るの、分かるでしょ」

「確かに」とミス・ペティグルーは断固として言いました。「それは間違ってますわ」「ニックが悪い男だってよく分かってるんだけど、でもどうしようもないの。彼が

現れると、逆らえなくって。ずっと彼から離れようとしてきたのよ。彼、三週間、留守にしてただけで、その間はまあうまくやってこれたから、別れるなら今しかないって思ったの。だからいて頂きたいの。もし彼に一人で会ったら、負けちゃうわ。あの人があるって思うと、もう胸が震えてくるんですもの。ね、だからあたしがよろこぶようになったら、よろこぶなるに決まってるんだもの。あたしをしつかり支えてくださる？」

ミス・ペティグラーはいまや、この家に来たそもそもの目的をすっかり忘れてしまっていた。二〇年間ではじめて、誰かが自分にいてほしいと言っている。それもあたくしの貧弱な学問や知識じゃなくて、あたくしという人間が必要だから。この二〇年間ではじめて、ミス・ペティグラーは自分自身に戻ったのでした。今のミス・ペティグラーは一人の女性であって、金で雇われているあやつり人形ではないのです。あまりにそれが誇らしく、うっとりとなっていたミス・ペティグラーは、今ならもつとひどい罪だつて許したに違いありません。ミス・ラフォースが二人の若い男といつぺんに恋をするのがなんでしょう。そんなふうに見えるのです。さて、ミス・ペティグラーは裁判官のようにつめらしく聞きました。

「いつもは人様に『忠告なんていたしませんのですけれど』とミス・ペティグラーは言いました。「でも、あたくしはずっと年が上でございませうし、あなたのお母様のつもりで申し上げますわ。もし、この男性が怖いとおっしゃるなら、その方とのつながりを切ってしまうのは簡単じゃありませんこと？ その方、あなたには何もできませんですよ？ ただ心をしっかりとばよろしいんですわ」

「そうね」とミス・ラフォースは悲しげに言いました。「でも、まだあなたには分かってないのよ」

「あたくし、物分りはとても早いほうだと思っておりますのよ」とミス・ペティグラーは嘘をつきました。

「もちろんよ」とミス・ラフォースはうなずきます。「もちろん分かってくださるわ」そして身を乗り出すと、「これまで」とミス・ラフォースは真剣に尋ねました。「あなた、男性にキスされて、胃がきゅーっとなったことってある？」

（どっこかとミス・ペティグラーは必死で考えました。（接吻に対して胃のどこかが反応するって読んだことがあるけど。それとも胃全部だったかしら？ どっちでもいいわとにかく安心させてあげるのが肝心）

「心配なさることはありませんわ」とミス・ペティグラーはかすれた声で言いました。

「胃が反応するのは科学的根拠があること……」

「心配なんかしてないわ」とミス・ラフォース。「そういつ感じ、大好きなのよ。もうだめ、あの人からは逃げられない。彼があたしを見るだけであたし、彼の腕の中で溶けちゃうの」

「断固とした意思があれば……」とミス・ペティグラーはおずおずと口を開きました。

「あたしはウサギ」とミス・ラフォース。「そして彼は蛇よ。蛇の目ににらまれたら、

ウサギは意思なんかなくなっちゃうの。そこにじっとしているのよ。そこにじっとして  
いたくなるの。たとえそれが死を意味しているとしても」

「とんでもない、死なんて」とミス・ペティグルーはぎよっとして言いました。

「死よりもっと悪いかもしれないわ」とミス・ラフォースは言つと、急に立ち上がった寝室に消えました。そして小さな包みを手に戻ってくると、それを広げ、ミス・ペティグルーの膝の上におきました。

「それがなんだか分かる？」

「見たところ」とミス・ペティグルーはそろそろと口を開きました。「ビーチャム・パウダーにそっくりですわ。神経と胃とリニューマチのたいへん効き目のあるお薬だと存じておりますけど」

「コカインよ」とミス・ラフォースが言いました。

「なんですって！ とんでもない！」

びっくり仰天してとびあがったミス・ペティグルーはそのいかにも無害に見える粉を、目を皿のようにして見つめました。麻薬。売り飛ばされる若い女性。いかがわしい酒場。ミス・ペティグルーの心に赤いピロドときらきらする金色で彩られた世界、悪党めいた黒い口ひげの男たちが脈絡もなく浮かびました。なんと一つ危険な悪の巣窟を見つけてしまったのでしよう！ 身を汚されないうちに逃げ出さなくては。ところがそこでミス・ペティグルーの分別がしぶしぶとささやきました。残念ながら今となつては誰もミス・ペティグルーの純潔を奪おうなんて思いやしません。危機に直面しているのはミス・ラフォースです。彼女を救わなくては。ミス・ペティグルーはさっと立ち上がると、キッチンに突進してその粉を流しにまきちらし、意気揚々と戻ってきました。

「これでよし！」息を切らせて「誘惑のたねは片付けましたわ」

そしてぐつたりと腰かけました。

「どうがおつしやって」その声には哀願するよつな響きがありました。「まさか、その常用なさつてはいませんか？」

「いいえ」とミス・ラフォースは言いました。「まだ一回も。そんなことしたらマイケルにばれちゃうわ。マイケルってほんと鋭いの。もし気がついたら、あたしめつたためにやられちゃう。そういうことやりかねない人だから。で、あたしにクスリを渡した男を殺しに行くわ」

「マイケル！」ミス・ペティグルーはくらくらしながら言いました。「また別の男の方じゃありませんかね？」

「ちがうわ！」ミス・ラフォースはあわてて首を振りしました。「そんなんじゃないの」暖炉の火をじつと見つめます。

「マイケルはね」ミス・ラフォースは憂鬱そうに説明しました。「あたしと結婚したいのよ」

「まあ！」ミス・ペティグルーは弱々しい声で言いました。

「こつう男には注意しなくちゃだめよ」とミス・ラフォースは暗い声で言いました。「さもないと、気がついたら教会の祭壇の前に立ってるなんてことになっちゃつよ。そつしたらもうおしまい」

ミス・ペティグールの長年の信念がドスンとゆすぶられました。祭壇を恐れるのは男だけだとばかり思っていた無邪気な空想はばらばらになつてくずれ落ち、これまでのうぶな人生観は永遠に消え去りました。(あたくしは世間というものを知らなすぎたんだわ)とミス・ペティグールは思いました。(こんなに女性が進んでいたなんてちつとも知らなかつた。今、ようやく気がついたわ)

いつものミス・ペティグールなら「ねえ、立派な男性の愛情を無にしてはいけませんよ」と言うべきところでしたが、何も言わず、口をしつかりとつぐみました。「」で、うつかりめそめそしたことを言つたらだめ。ミス・ラフォースを守ろつなんて、おかどちがいにもほどがあります。ミス・ペティグールは背中をしゃんと伸ばしました。

「言つたね、ベイビー」とミス・ペティグールは落ち着きはらい、高らかに言い放ちました。

「え？」とミス・ラフォース。

「アメリカのスラングですよ」とミス・ペティグールは説明しました。「映画で聞きましたの」

「ああ!」

「いつつも思つてたんですよ」とミス・ペティグールはまた言いました。「いつかスラングを使つてみたいって。はめをはずす、って言つんですの? でも一度もそんなことできなくて。子供たちによくありませんでしょ。聞かせたらいへんですもの」

「え、ええ、そうね」とミス・ラフォースはきよとんとしながら言いました。

「わかつていただけで嬉しゅうございます」とだけミス・ペティグールは言いました。

「あたしはニツクのことを分かつてくれて嬉しいわ」

「もちろんですとも」ミス・ペティグールは頭をあげました。「ニツクはワルでハンサムで魅力的」とはつきりした声で並べます。「彼こそ人生、興奮、スリルつてとこですわね」

「ええ」

「ところがこちらの善良な方、あなたと結婚したがっているマイケルさんは、人間的にはとつても優れているけれど、退屈。彼には燃えるものがない……想像力というものが欠けているんですわ。窮屈なのね。あなたは華やかさや活気や音楽がほしいのに、彼が与えてくれるのは……郊外の一軒家つてとこかしら」ミス・ペティグールは見事にまとめてみせました。

ミス・ラフォースはまつげを伏せてちらりと見ると、「そつね……」と気がとがめたように言い始めました。「あたしには分からないわ……」

「あたくしも分かりませんわ」とミス・ペティグールは簡単に言いました。「あなたに

「ご忠告はできませんもの。そんなでしゃばったことはできません。あたくしの人生は失敗でしたもの。よそさまにご忠告なんてできた柄じゃありません」

「まあ」としかミス・ラフォースは言いませんでした。

「あなたは」とミス・ペティグルーははにかみながら言いました。「とってもお綺麗ですわ、その……そのお召し物をつけてらっしゃると。若い男性がみんな恋におちるのも不思議じゃありませんわ。ね、まだ将来をお決めにならなくてもいいんじゃないかしら」

ミス・ラフォースは可愛らしい口元に微笑みを浮かべて身を乗り出しました。

「そうかしら？」と熱心に聞きます。「これ、わざとずっと着ているの。ネグリジェってなにか、そうね、特別な魅力があると思わない？ それに男の人って朝はほんとに扱いにくいんですもの」

一番上の娘がこれから結婚するという家庭に住み込んだときの、一世一代の経験を思い出すと、ミス・ペティグルーは物知り顔でうなずきました。

「ある種の……セ、セクシーな魅力ですわね」そう言つと自分の言葉に顔を赤らめました。「男性にはまじとにこらえがたいものですわ」

「まさにその通り」とミス・ラフォース。

と、ミス・ペティグルーは突然思い出しました。ぎよつと息を呑むと、

「でも、ミス・ラフォース」ミス・ペティグルーは焦って言いました。「もう、決心が揺らいでしまつていらっしゃるわ。だめですよ。魅力的に見せたいなんてもつてのほかよ。一番、地味な格好をなさらなくちゃ。彼を撃退するんですから」

「分かつてるわ」ミス・ラフォースは後ろめたそうに言いました。「でもね、どうしてもあたし……」

そのときカギがドアの錠にそつと差し込まれるかすかな音がして、二人は慌てて互いに顔を見合わせました。そのとたんミス・ペティグルーの目の前で、実に見事な演技が披露されたのです。ミス・ラフォースはさつと椅子に寄りかかったかと思つと、

「いつも思つんだけど」と気だるい、つまらなそうな調子で言いました。「あたしには青が一番、似合うのよ。瞳の色を際立たせてくれるの」

ドアが開き、閉じました。ミス・ペティグルーは、あらつという驚き、信じられないという不審げな顔、そして歓喜に輝く表情をミス・ラフォースが次々と器用に浮かべるのを、呆然と感心しながら見守っていました。ミス・ラフォースはさつと立ち上がり、衣擦れの音をさせて両腕を差し伸べながら駆け寄っていきます。

「ニック」ミス・ラフォースは高い声を出しました。

ミス・ペティグルーはあわてて目をそらします。

(あらまあ)とミス・ペティグルーは思いました。(また……またあれね。あんな大っぴらに。これまでずっと映画のキスシーンはわざと大きさにしてるんだと思つてたのに)